

## 差の消滅

——村田沙耶香「授乳」から「コンビニ人間」まで——

矢野千晶

村田沙耶香は二〇〇三年、「授乳」が第四十六回群像新人文学賞優秀作となり、文壇デビューを果たした。二〇〇八年には殺人衝動に襲われる少女を描いた「ギンイロノウタ」で第三十回野間文芸新人賞を受賞し、その後も性の違和感を問う「ハコブネ」(二〇一〇)、家族からの愛情に飢える少女が自分探しをする「タグイマトビラ」(二〇一一)などを発表した。二〇一二年にはニュータウンで暮らす少女の自我の芽生えや性の成長を描いた「しろいろの街の、その骨の体温の」が第二十六回三島由紀夫賞受賞作となった。この頃までの作品は、性が大きなテーマとなっているものが多かったが、「殺人出産」(二〇一四)や「消滅世界」(二〇一五)は人工授精の技術が発達した世界を舞台としており、性を問題とはしない。そしてその傾向

は、二〇一六年発表の「コンビニ人間」にまで受け継がれる。「コンビニ人間」は、三十六歳独身で恋愛経験皆無の女性、古倉恵子を主人公とし、「普通」とは何かを問う物語である。古倉はコンビニエンスストアで十八年間、アルバイト店員として働いている。子どもの頃から周囲に、奇妙に思われていた古倉が、初めて正常な人間になることができたと考えた場所がコンビニであった。コンビニのマニユアルや周囲の人々の真似をしながら「普通」を装う古倉だったが、そこには現代社会と戦おうとする意思がみられない。「コンビニ人間」は初の候補作にして、第百五十五回芥川龍之介賞を受賞した。芥川賞選評では奥泉光が「本作はこの人間世界の真相を、世間の常識から外れた怪物的人物を主人公に据えることで、鮮やかに、分かりや

すく、かつ可笑しく描き出した<sup>(1)</sup>。」と評した。一方、村田の受

たい。

賞に反対の意を示した数少ない選考委員である島田雅彦は「主

### 一、欲望から無関心へのセックス

人公はいずれサイコパスになり、まともな人間を洗脳してゆく

村田作品のほとんどは、女性の一人称形式を取っている。二

だろう<sup>(2)</sup>。」と批判的な意見を述べた。二者とも肯定否定の違い

〇一六年までに単行本化された作品の中で、男性主人公のもの

はあれども、古倉を「普通」から逸脱した人間であると認識し

は一作もない。また、三人称形式なのは「星が吸う水」(二〇

ている。しかし古倉は、己の異常さを理解したうえで、他人に

〇九)、「ガズズミ航海」(二〇〇九、講談社『星が吸う水』収

危害を加えないようにふるまってきたのである。したがって、

録)、「ハコブネ」(二〇一〇)のわずか三作品である。村田作

古倉は島田の恐れるようなサイコパスにはなり得ないと考える。

品の主人公は、男性から抑圧や支配を受けることはなく、か

むしろ注目すべきなのは、他者を模倣のモデルとして利用する

いって女性であることに誇りを持っているような素振りも見せ

である。

ない。むしろ、従来支配する立場とされる男性側に立っている

村田の初期作品には、満たされない欲望や女性特有の苦しみに

ようにみえる。それは作中で、男性が女性よりも劣った存在で

葛藤する主人公の姿が描かれていた。その悩みの原因、そして

あることの表れではないかと考える。村田作品には過激な描写

で解決の糸口には、常に他者の存在があった。しかし近年の作

が多くみられるが、特に性描写に顕著である。セックス、もし

品では、他者に影響を与えるでも与えられるでもない、すなわ

くはそれに似た行為において、女性は受け身ではなく主体と

ち他者に対して無関心を貫く女性主人公のあり方が描かれる。

なって進んでいく。デビュー作の「授乳」(二〇〇三)<sup>(3)</sup>では、

また、無関心の対象が男性であることが特徴的である。本稿で

女子中学生の直子が支配欲を満たすために、「ゲーム」と称し

は村田作品における主人公と他者との関係の変化を分析しながら、常識的な価値観から逸脱する村田作品の持つ意味を考察し

て家庭教師の男性を自分の意のままに動かしている。

私は先生の髪の毛を鷲掴みにし、顔をこちらへ向けさせた。私は右手の指をいきなり先生の口につっこんだ。先生は一瞬あばれかけ、すぐに大人しくなった。(略) 私は舌をそのまま自分の胸にひきよせた。先生の唾液がひんやりと胸に染みだが、私はかまわず自分の乳房を先生にくわえさせた。

先生は抵抗をやめた。はじめから抵抗する気などないのだ。私は先生の髪を鷲掴みにし、強引にこちらへ引き寄せ、さらに深く乳房をくわえさせた。背中をつよく平手で叩くと、先生がぐっと喉をならした。それを言い訳にして先生はやっと吸い始めた。

(講談社文庫『授乳』四三〜四四頁)

「授乳」は、直子が未熟ながらも発達しかけている女性性をひけらかしながら、先生を思うままに支配している様子が描写される。直子は先生に抵抗を許さない。先生も諦め、行為が直子の母親にばれてしまった際、直子に被害者面をされていても弁解する気すらない。女性に支配される男性は「しろいろの街」の、その骨の体温の(以下「しろいろ」)(二〇二二)<sup>4</sup>にも登

場する。小学四年生の結佳は、同級生の男子である伊吹を「おもちゃ」として扱い、キスを強要する。「授乳」の先生と異なるのは、中学二年生のときに伊吹が初めて、結佳の行動に強い抵抗を示す点である。この抵抗は結佳に嫌悪感を抱いているわけではなく、ちゃんと恋人同士になるなら受け入れるということである。伊吹は結佳に歩み寄ろうとしているのに、結佳は遮断してしまう。これは、人気者の伊吹と恋仲になればクラスメイトから冷たい視線を向けられてしまうかもしれない恐怖の他に、伊吹がいつしか自分の支配から完全に抜け出してしまうことからの逃避であると考えられる。

この二作品の共通点として挙げられるのは、一つは支配欲を満たしていること、もう一つは満たすための行為を第三者に隠していることである。他人の目が触れない場所で男性を操る。殴ったり蹴ったりしているわけではないため、身体に傷は残らない。しかし、主人公による自己満足な行動は、相手の男性に目には見えない傷を残しており、このことから精神的な暴力性が見える。

「授乳」の暴力性には、支配欲の他に男性への悪意が潜んでいる。すなわち男性嫌悪である。直子の母親は、夫のことを生

理的に嫌っており、表向きには平静を装いながらも、陰で夫への嫌悪感をあらわにし、次のような行動を取る。

母が急に、ゴミ箱のペダルをきゅつと踏んだ。母はぱくりと開いた蓋の中をのぞき込むようにかがみ、ふくれたおしりを二、三度ゆすつて、中からレタスの切れ端を取り出した。それは排水口の髪の毛、埃の黒い綿、湿ったティッシュペーパーの破片などにまみれていた。母はそれを丁寧に洗い始めた。時折ちらちらとこちら側に見える横顔に、とても安らかな表情が浮かんでいた。母はそのレタスをはたいて水気を切ると、無造作に一枚のお皿に載つけた。父のだ。すぐにわかった。(講談社文庫『授乳』二六頁)

母による父への密かな嫌がらせを目の当たりにした直子は、母に対して軽蔑の感情を抱きつつも、父の料理の中に瓶に残っていた母の睡眠剤を全部「ぶちまけ」て、母に同調している。いうまでもなく、直子も母と同じ気持ちでなければこんな行動は起こせない。娘の父に対する嫌悪は、つまり女性から男性への嫌悪なのである。

支配欲を満たすための道具として利用しながら嫌悪するとう、女性にとって都合のいい対象として扱われてきた男性は、いよいよ女性から拒絶される。その最たる例として、女性のセックス忌避が挙げられる。「ハコブネ」(二〇一〇)<sup>(5)</sup>の主人公である里帆は、好きな男性とのセックスを辛いと感じてしまう。それがきっかけで自分は本当に女性なのか疑問を持ち、第二次性徴をやり直そうとする。里帆は男性となるべく、アルバイト先の女の子を好きになろうとしたり、胸をつぶすタンクトップを身に着けたり、さまざまな方法を試みる。苦悩する里帆に、地球とセックスをするもう一人の主人公、知佳子が「別に人間相手じゃなきゃいけない決まりはないじゃん。クツシヨンとだって、きつとセックスできるよ」(一九二頁)と言いつつ。最初は信じられないといった様子の里帆だったが、知佳子の言う通り、クツシヨンの感触で心も身体も満たされてしまう。結局里帆が辿り着いたのは、男や女といった概念のない世界であつた。

身体的な性差をなくした作品として「無性教室」(二〇一四)<sup>(6)</sup>が挙げられる。主人公のユートが通う高校には校則がある。生徒は全員、髪型は十センチほどのショートカットで、指定の

シャツに紺色のズボンという服装を義務付けられる。シャツの下には、トランスシャツとよばれるぴっちりとしたタンクトップを着る必要がある。「ハコブネ」で里帆が着用したタンクトップ同様、女子の胸がつぶれた状態にするためである。そして一人称は「僕」でなければならぬ。学校内では髪型や服装、一人称にいたるまで、皆が同じ条件で過ごし、性別のない存在となるのである。といつても高校生にもなれば、身長や声、体

つきで性別を判別できてしまう生徒もいる。例えばユートに恋愛感情を抱くクラスメイトのユキは、百五十五センチのユートよりも背が低く、大きな瞳や高い声を持っている。このことからユートは、校則を脱がなくてもユキは女だと断定する。しかしそれでも暗黙の了解で、自ら性別を明らかにすることはない。ユートも本名は優子というが、女性であることを隠して高校生活を送っている。ユートはセナというクラスメイトに、性別がわからないまま恋をする。そしてセナと互いの想いを確かめ合う場面でこの話は閉じられるが、最後までセナの性別は分からないままである。ユートはセナに恋心を打ち明ける際、性別を明かさないうままでは恋愛ができないと言うセナに対し「恋をしたらセックスをしなければいけないなんて、誰が決めたの？

それに、性別を知らないでセックスができないなんて、きつと思ひ込みだつて思う」（一五七頁）と告げる。恋をすること、セックスをすることに性別は関係ないと主張しているのである。女なら男を好きになるのが当たり前、その逆で女は別種である男を忌み嫌う、というような性別があるが故の偏った考えが生まれない世界を作り出している。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールは『第二の性』の中で、「ひとは女に生まれぬ、女になる」と語っている。これはボーヴォワールにとって、ジェンダーは人間が生まれながらに備わっているのではなく、文化の強制のもとで構築されたものであることを意味する。つまり、生物学的な「セックス」とジェンダーは区別されるべきもので、必ずしも性別のカテゴリーが一致するわけではないということである。「無性教室」では、生物学上は女として生まれたユートが、校則という文化的な要因によって、強制的に男となる。作中では男でも女でもない「無性」になるのだと書かれているが、校則の内容からして、男を基準としていることは明らかである。何故、男となることが校則なのか。ボーヴォワールの説に従うならば、女は後天的につくられる。それは、人間にとって男の姿が、自然で望まし

ということを表す。しかしこの物語は、男性中心社会を描いているわけでは決してない。身体的特徴を隠し、同じ条件下に置かれることにより、男女をはっきりと区別できない性の曖昧さを浮き彫りにしているのである。前述の通り、ユートはセナの性別に確証がないままセナに好意を持ち、ユートの中にはセナが女である可能性が残っている。しかしユキに対しては、自分と同性だと決めつけ、ユキから想いを告げられても初めから恋愛対象とみなしていない。自分の告白を拒絶するユートに、ユキは「それは、ユートが女だと思いつ込んでるからだ。ユートは僕の身体、実際には見たことがないでしょう？」この制服の中に、本当にベニスがあったら？」（一四四頁）と揺さ振りをかける。自分の先入観を感付かれたユートは、改めて制服に包まれたユキの身体を見る。

私より華奢なその手足は、細すぎるせいか、柔らかさより骨や筋肉の硬さが見て取れる。長すぎる睫毛も、少し高い声も、ユキを女の子だと断定する決定的な証拠とはいえない。

〔小説野性時代〕二〇一四年八月号

「無性教室」一四四頁

ユートは女である自分の身体と比較した上で、自分よりも女らしく見えるユキは、間違いなく同性であると判断した。それにも関わらず、ユキのたった一言によって、ユートの確信は疑惑へと変貌する。セックス、すなわち生物学上の性差は、性転換でもしない限り不変だとしても、ジェンダー、すなわち社会や文化の中で獲得される性差は、区別する明確な指標がなく、また固定されるものではない。人間は誰もが男にも女にも、もしくはそれ以外の性、例えば「無性」にもなれる。不明瞭な性差は、肯定的に捉えると、固定観念に縛られない新たな性のあり方を提言する手段になり得るのではないかと考える。

物語において、現実世界の常識的な役割は、次第に意味を為さなくなっていく。「殺人出産」(二〇一四)<sup>8</sup>では、「産み人」という、人工授精で十人産んだら一人殺せる、殺人出産システムが定着した、今から百年後の世界を舞台としている。主人公、育子の母はシングルマザーであり、人工授精で育子を出産した妊娠をするのに男性を必要としない。そのためか「殺人出産」に登場する男性は、口うるさい上司や、育子にセクハラ行為をした高校時代の教師といった、女性の敵といつてもいい人物ばかりである。男性の存在は重要視されておらず、それどころか

目障りだという印象を受ける。

人工授精が発達した世界設定は、「消滅世界」(二〇一五)<sup>9</sup>でも続く。恋愛の対象は大抵アニメのキャラクターで、セックスは古臭く、汚らわしいものと考えられている。結婚制度は残ってはいるが、夫婦でセックスをすることは近親相姦だとみなされるため、子どもが欲しい場合は人工授精を行う。人工授精の発達は、女性だけではなく男性にも適応される。つまり、男性も妊娠、出産が可能なのである。「殺人出産」でも男性が妊娠をする例があるが、身体に負担のかかる人工子宮を施してあるため、男性の死亡率が高いという記述がある。しかし「消滅世界」では、主人公の両音が流産したのに対し、夫は無事に出産する。子どもを産むという女性特有の役割を女性が果たせず、代わりに男性がその役割を担う。家事や子育てはおろか、妊娠、出産という男性には不可能な女性の仕事までもこなせてしまう。これはつまり、男性と女性の境界が、限りなく無の状態に近くなったといえるのではないかと考える。

ここまで性に焦点をあてて見ていくと、「授乳」の頃から一貫して、村田は男性を主体とした物語を描いていないことがわかる。男性は主人公の欲を満たすために利用する存在から、憎

しみや嫌悪の対象、邪魔な存在へと位が下がっていく。さらにいえば初期の作品では、精神面という表には見えない形で、男性的な女性、女性的な男性を描いてきた。それが「殺人出産」や「消滅世界」で世界観を明確に述べることににより、社会システムというはつきりとわかる形で、男らしさや女らしさを取り扱ったのである。

## 二、リアルを生きる主人公と他者との関係

近年の村田作品は、「殺人出産」や「消滅世界」のように、未来の世界を舞台としたものが多い。「生命式」(二〇一三)<sup>10</sup>は、死んだ人間を弔う際にその人肉を食べる儀式が行われる世界が描かれている。参加者は死んだ人間の肉を食べながら、受精相手を探す。相手を見つけたら二人で退場し、どこかで受精を行う。これが生命式の一連の流れである。この習慣が息づいてから、まだ三〇年しか経っていないという設定で、裏を返せば三〇年前までは、人肉は食べてはいけないものだというのが常識だったのである。主人公の真保は幼稚園の頃、食べたいものを挙げていくゲームをしたときに、軽い冗談のつもりで「人間」と言った。すると周りの園児たちや先生が、真保の発言に大騒

ぎする。ゾウや猿と言っても何の問題もなかったのに、何故人間は駄目なのか。真保にはどうしてもわからなかった。そして時が過ぎ、真保の言葉が現実のものとなった。あれほど糾弾された常識はずれの発言が、数十年で常識となり変わったのである。「生命式」における人肉は、死から生を生むために食べるという意味付けがある。そのため好き嫌いはあれども、人肉を食べる行為自体に異議を唱える人物は、生命式が定着した時問軸には一人も存在しない。

「素敵な素材」<sup>11</sup>（二〇一六）は、毛や歯、骨などの、人間の身体の一部を素材にしたファッションやインテリアが流行している世界を舞台としている。「生命式」と違うのは、このファッションに断固反対している人物がいることである。主人公ナナの恋人であるナオキは、人間の一部分を身に着ける行為を、死への冒険だと主張する。これに対しナナやその友人は「病気なんじゃない？」（二二五頁）、「父親との関係が良くなかったみたいだから、それが原因なのかも」（同頁）と、陰でナオキの過去や人格までも否定する。そして自分の信念を貫き通していたナオキも、父の皮膚でつくったウエディングベールを目にしたことで、その美しさに心が揺らいでしまう。

これらの作品に共通しているのは、読者からすると異様と思われる世界に、主人公が順応している点である。作中で、主人公たちは常識的な感覚の持ち主とみなされている。他方「素敵な素材」のナオキのような感覚を持っている者は、非常識で流行遅れであると糾弾の対象となる。しかし現代を生きる我々の大半は、ナオキの主張に賛同するのではないだろうか。少数派が多数派となるとき、異常と正常が簡単に入れ替わってしまう危うさの暗示が読み取れる。

「コンビニ人間」<sup>12</sup>（二〇一六）はここ数年では珍しく、パラレルワールドではなく現代社会を描いた作品である。村田は中村文則との対談で、「コンビニ人間」を執筆したきっかけを次のように語っている<sup>13</sup>。

最初は全く違う、オタクの女の子が主人公の話を書いたの。でも『消滅世界』っていう、前に書いた作品と被っているような気がしてきた。（略）でも、最初から編集さんと相談して決めていたのが、へんてこな設定じゃない、リアルな世界で書こうっていうこと。（略）たぶん、『しろいろの街の、その骨の体温の』みたいなリアルに近

い世界と、「殺人出産」みたいなへんでこな世界をいつか融合させたい気持ちがあったんだと思う。

村田は過去のエッセイやインタビューで度々、自身が育った千葉県のニュータウンについて話しており、「しろいろ」の舞台のモデルだと明言している。<sup>(14)</sup>「しろいろ」は村田が思春期に感じた、無機質な街の姿や教室内の息苦しさをそのまま切り取ったように描写され、余す所なくリアリティを追求した作品となった。そして「コンビニ人間」は、村田にとつての過去ではなく、今を切り取っている。村田は執筆業の傍ら週三回、コンビニエンストアでのアルバイトを続けている。現役の店員によるコンビニエンストアの描写は、店内の様子や仕事の手順など、細部に至るまでリアリティに溢れている。現代のリアルを描いた「しろいろ」と「コンビニ人間」に共通しているのは、主人公が世界に順応しているふり、をしてしている点である。「しろいろ」の結佳は、スクールカーストの最下層に落ちてしまふことを恐れ、極力自己主張をせずに、周りから害のない存在と思われよう<sup>に</sup>過ごす。「コンビニ人間」の古倉も、他人のコピーをしなが<sup>ら</sup>「普通」の人間を演じている。一方「殺人

出産」に代表される、村田のいう「へんでこな世界」に住む主人公たちは、ありのままの自分を世界に受け入れられている。世界に溶け込むために仮面を被る必要がないのである。

ここからは、主人公と他者の関係に注目しながら、「しろいろ」と「コンビニ人間」を比較していきたい。当時小学四年生の結佳は、自分が生まれ育った街を嫌いだと言う。

(こんな街、大嫌い)

心の中で呟くと、また自分が鮮明になった気がした。

皆がわくわくしているものを、こっそりとけなすと、なんだか自分がすごく特別な女の子みたいだ。

(朝日文庫『しろいろの街の、その骨の体温の』二七頁)

結佳の住むニュータウンは、発展途上の街である。これから立ち並ぶだろう施設や遊び場を想像して、子どもたちはわくわくする。結佳の心の声は、そんな平凡な子どもになりたくない願望の表れであり、この時点で本気で街を嫌っているわけではない。本人も「私は「嫌い」という言葉が好きなのかもしれない。なかった(一八頁)」と、周りの人間と違う感性を持つことで、

自我を見出ししている節がある。しかしクラスメイトの若葉も、結佳と同じく街が嫌いだと口にする。その理由は、近くに可愛い店がないとか、電車の本数が少ないというような些細なことだった。結佳は若葉に街が嫌いな理由を訊かれるが、上手く伝えることができない。すると若葉は、結佳の心の内を察したように「ふうん。なんか、凄いな、結佳ちゃん。ドラマに出てくる女の子みたい」（四一頁）と微笑む。結佳は若葉に、自己陶酔していることを見抜かれたようで恥ずかしくなる。若葉は、同級生たちの中でも発育が早く大人びていて、周囲からも特別な存在だとみなされている。結佳は自分を、他者と一線を画していると思ひ込むことで初めて、特別な存在になれる。つまり若葉のように他者から認められる地位を築いていないため、自己満足でしかない。結佳が平凡を脱ぎ去ることは叶わないのである。

では古倉の幼少期はどうだろうか。先にも触れたように、古倉は奇妙がられる子どもであり、その様子がわかる具体的なエピソードが数ページに渡り綴られる。例えば幼稚園の頃に、公園で小鳥が死んでいるのを見つけたとき「お父さん、焼き鳥好きだから、今日、これを焼いて食べよう」（一〇〇頁）と提案

した。また小学校に入ったばかりの頃、男子が取っ組み合いのけんかをして大騒ぎになったときに、止めようとして男子の頭をスコップで殴った。いずれも古倉は良かれと思って起こした行動であり、全く悪気はない。しかし家族や学校の反応から、理由はわからないが、いけないことをしたのだと自覚する。そうして家の外では極力口を利かないようにし、誰かの真似をするか、指示に従うかして、自ら動くことをやめてしまう。コンビニ店員になる前から、既に古倉はマニュアル通りに行動する術を身に付けているのである。むしろアルバイトは、古倉がおよそ十年ぶりに起こした、自主的な行動であった。結佳は他者から変わり者と見られたがっていたのに対し、古倉は囚らずも変わり者と認定されている。しかし古倉は両親が「どうすれば『治る』のかしらね」（一〇二頁）と相談しているのを耳にし、己の修正を試みようとする。だが結局、その方法がわからない古倉は、とにかく他者の視線が自分に向かないよう、余計なことを口にしないことに努めるのだった。

次に「しろいろ」は中学生となった結佳、「コンビニ二人間」はアルバイトを始めた後の古倉を見ていきたい。中学二年生の

結佳は、特別な女の子に憧れていた児童期から一転、教室内で目立たないように生活する。換言すれば良くも悪くも特別視されない、無難な立ち位置である。小学校の頃人気者だった若葉は、スクールカーストの上位にいるものの、クラスのリリーダ格である小川に縋り付いているようだった。結佳はそんな若葉の姿を、輝きが失われたと蔑む。ある程度安定した場所を確保した結佳は、クラスメイトたちを観察し、見下す傍観者となることに快感を覚える。

私は「観察する私」になりきることで、いかにも教室を冷静に見つめているかのように、こつそりと、皆より少し高いところにいるかのような気分浸っている。そして、実際には値段の低い自分のポロポロの自尊心を慰めている。男子がふざけてオナニーと口にしてのを聞くけれど、それは本当はこういうことなんじゃないかと思う。壊れた自分の自尊心を修復するために、何でもするし、それがどんなくだらしない手段であっても、かまわず必死に自分を慰め続ける。

（朝日文庫『いろいろな街の、その骨の体温の』一三七―一三八頁）

結佳は教室内での自分の価値の低さをわかっているが、クラスメイトたちを卑しめる。この価値観をオナニーと同義だと捉え、劣等感の塊のような自尊心を慰める。内に歪んだ感情を隠しても、表では安全な女子を演じていた結佳だったが、秘密の行為をするために伊吹の家を訪ねたことが教室中に知れ渡ってしまう。行為の内容までは明るみにならなかったが、結佳はクラスの輪から弾かれ、孤立する。同時にカーストの呪縛から解放された結佳に、変化が訪れる。カーストの最下層にいる信子が、男子にからかわれても何度も立ち上がる姿を見て、きれいだなあ、と思ったのだ。信子は小学校の頃、若葉と三人でよく遊ぶ仲であった。しかし結佳はこの頃から、子どもっぽく、お世辞にも良い見た目とは言えないくせに自信家な信子のことを見下していた。自分も若葉も、年が経て環境が移り変わるにつれ、他人に対して臆病になってしまった。だが信子は、いつだってまっすぐに敵と戦っている。そんな純真な信子は、結佳の目には美しく映った。結佳はこのとき、教室に飲まれないう自分だけの価値観を手に入れることができたのである。

一方古倉は大学一年生のときに、偶然オープン前のコンビニを見つけ、アルバイトを始める。迎えたオープン初日、古倉は

表情、姿勢、声のトーンまで研修で習った通り、忠実に再現してみせた。社員からの評価は高く、古倉はこのとき、初めて自分が世界を構成する一部になれたのだと感じる。

そのとき、私は、初めて、世界の部品になることができただった。私は、今、自分が生まれたと思った。世界の正常な部品としての私が、この日、確かに誕生したのだ。た。

〔文學界〕二〇一六年六月号

「コンビニ人間一〇六頁」

アルバイトによって、世界との接点を得た古倉を、家族は成長したと喜び、応援した。しかしいつまでも就職しないで、コンビニのアルバイトにのめり込む古倉に、家族は徐々に不安が募る。当の古倉は、何故自分が普通の就職先ではないのかの見当もつかなかった。ただ、完璧なマニュアルがない外の世界で、どうすれば「普通」の人間になれるのかわからないのは確かだった。ある日、古倉は地元の友人の集まりに参加する。友人と会って話すときも、古倉はアルバイト先の同僚の喋り方をマニュアルとして吸収し、活用する。現在の同僚ははきはきと

感情豊かに喋る女性だが、数年前はのんびりとした学生が多かった。周りの人間が変われば、古倉のマニュアルの内容もガラリと変化する。以前と雰囲気の違い古倉に友人たちも何となく気づくが、さして問題にはしなかった。だが古倉が、三十代になっても就職も結婚もしていないという発言に対しては、友人たちは困惑の表情を浮かべる。就職に関しては、持病で身体が弱いからアルバイトをしている、アルバイト先では、親が病気がちで介護があるからという言い訳を使い分けている。これは妹が考えた嘘である。しかし恋愛に関しては、上手い言い訳が見つからない。古倉自身は性に無頓着なだけで、経験の無さを問題だとも思っていない。それなのに友人たちは、結婚はともかく恋愛経験すらないのは何か深い事情があるからだと思いついてはいる。古倉のマニュアルには、他者との接し方の手本はあっても、他者との肉体的、精神的なつながりの重要性についての記述はない。

古倉の働くコンビニの店長が八人目に代わったとき、ある一人の新人が入った。白羽という、ひょろりと背の高い、針金のハンガーのような男性である。覇気がなく仕事態度も悪い白羽は、店長や同僚たちからの評判もすこぶる悪い。白羽も当事者

にも関わらず、コンビニで働く人間を低俗だと馬鹿にする。では何故コンビニで働き始めたのか。古倉は素朴な疑問を白羽に投げかけると、婚活のためだと言う。しかし結局白羽は、客の女性にストーカー行為を働き、クビになってしまう。厄介者がいなくなつてせいせいしたのか、店長たちは口々に白羽の悪口を吐く。古倉も同調しながら、自分が異物になつたときの末路を想像するのであった。

最後に主人公の救いについて言及したい。自分の価値観に気づいた結佳は、物語のラストで伊吹と本当のセックスをする。これまで幾度となく繰り返されてきた、強姦ともいえる支配的なものではない。慈しむように、互いの体温を感じながら身体を重ね合わせるのである。村田は二人の行為を「完璧で美しいセックス」<sup>(15)</sup>と称する。このセックスは、歪な関係であつた結佳と伊吹が、互いを肯定し合わなければ成立しない。二人は今更簡単に修復できる関係ではない。よつてこの展開は、些かりアリティに欠けるのではないかという指摘もできる。村田はこの場面について、次のように話す<sup>(16)</sup>。

本当は最後までリアリティに徹するべきだったと自分でも思っているんですが、きっと作家のエゴなんでしょね。最後はどうしてもちゃんとしたセックスを彼女にさせてあげたかった、それは作品の意思というよりも私の意思なんだと思います。(略)

セックスシーンを入れるにしてもラストだけ時間を飛ばして大学生くらいで伊吹ではない恋人としてどうか、そういうことも考えたんですが、どうしても伊吹と、しかも中学生でさせてあげたかった。まだ未発達な容姿のままの結佳が自分の身体を受け入れてセックスをするのをどうしても書きたかったというのは、いろいろなことを裏切っていると自分でもわかっていながら、そうしたくてしてしまつたラストだと思っています。

村田は、結佳が中学生の時点で、それも伊吹と初めてのセックスをすることが重要だと考えている。結佳は伊吹を「おもちゃ」として扱いながらも、次第に一人の男性、初恋の相手として意識するようになった。セックスをする前、結佳と伊吹は互いに本当の想いを告白し合う。伊吹は結佳を「大嫌い」と言

い、結佳は伊吹を「大好き」だと言う。伊吹の「大嫌い」が、伊吹が自分に向き合ってくれようとした結果であることは、結佳は了知している。

「一番嫌だったのは、谷沢がそれを押し殺して、谷沢がきつと一番嫌いなやり方で、おれにぶつけたってこと。谷沢が大嫌いな谷沢が、おれより傷ついた顔をして、自分を傷つけてたってこと。おれは、谷沢の好きな谷沢と、ああいうことがしたかった」

（朝日文庫『しろいろの街の、その骨の体温の』三〇四頁）

伊吹は当の本人よりも早く、結佳の持つ価値を感じていた。結佳の言葉や、目の奥にある強い何かに、伊吹の心は揺さぶられていた。「ああいうこと」をしてもいい相手であると、伊吹は結佳を認めていたのに、結佳は伊吹だけでなく、自分自身からも逃げていた。結佳は、そんな自分のことをちゃんと嫌ってくれた伊吹を好きになったのだった。そして結佳も、伊吹とのセックスの最中、自身への価値を見出すことができた。

「私には値札がついてて、その数字がすごく低いんだ。でも、私、それと関係なしに、すごく綺麗みたい」

私は、教室の価値観ではなくて、信子ちゃんを美しいと思っただけの「目」を手に入れていた。その「目」で見ると、点数の低い自分の姿形が、悪くないように思えるのだった。

（朝日文庫『しろいろの街の、その骨の体温の』三〇八頁）

結佳にとって人間の価値とは、常に他者との比較の末に生まれるものであった。それが集団の輪から外れたことで、色眼鏡でものを見ていた自分に気づかされる。他人より容姿が醜いから、カーストの下位にいるから、人間として劣っている。結佳はそう思い込んでいた。しかし先入観を取っ払って、自分だけの「目」で世界を見ることで、結佳は本当の美しさと出逢えた。そして伊吹に恋をし、伊吹に全てを曝け出した結果、結佳は自分自身の美しさにも気づき、人間として成長することができたのである。

では結佳にとっての伊吹のように、古倉にも救いの手を差し伸べてくれる人物はいるのか。結論から言えば、古倉を救う他

者は存在しない。古倉はコンビニのアルバイトを辞めた白羽と再会し、二人で婚姻届を出すことを提案する。婚活中の白羽と、何で結婚しないのかと訊かれ続ける古倉にとって、結婚相手がいると周りに公表できるのは、都合がよく、利害が一致していると思われる。古倉はとりあえず、白羽を自分の部屋に住まわせることにする。しかし二人の間には性交渉はまったくなく、

主人とベットのような関係である。古倉は形だけとはいえ、白羽と同棲することによって、膠着状態の今に変化をもたらそうとした。だが変化したのは古倉ではなく、むしろ周りの人間たちであった。妹や友人たちは、家に男性がいるというだけで狂喜乱舞した。コンビニの同僚たちは、あれほど白羽を嫌っていたのに、手のひらを返したように盛り上がった。同志だと思っていた仕事仲間たちが、コンビニの仕事よりも店員のゴシップに意識が集中する光景は、古倉にとって衝撃的であった。

古倉は定職に就くよう白羽に促され、十八年間のコンビニ勤務に終止符を打つ。コンビニのアルバイトによって生活のサイクルを構築していた古倉は、そのリズムが崩れ、気を失ったように毎日を送る。そしてコンビニを辞めて一か月後、古倉は派遣の面接にこぎつけることができた。ところが面接前に何気

なく入ったコンビニで、古倉は「声」が聞こえる。コンビニの「声」に導かれるように、古倉はアルバイトの女の子に指示を出し、勝手に商品の配置を並べ替える。古倉はコンビニ店員でいることで、気を取り戻す。古倉を救うのは他者ではなく、コンビニに他ならないのである。

結佳にとって他者は、自分を測るためのものさしに過ぎなかった。しかし他者に魅力を感じ、また自分の存在を認められたことは、醜い自分を肯定する足掛かりとなった。それに対し古倉は、最初から最後まで、他者から良い影響を受けているとはいえない。古倉を救済するのは、他者の声ではなく、コンビニの「声」なのである。結婚も就職もしない古倉の状態を、本人よりも家族や他人が憂いている。だが古倉は、彼らの忠告を相手とせず、社会の異物となることに危機感も抱かなくなる。それどころか他者の存在すらも断ち切って、ただコンビニに身も心も捧げるのである。

## 結論

第一章では、性に焦点を当て、女性が主体となる支配的な

セックスから、男性と女性を同一化しようとする動き、さらにはセックスが意味を為さなくなり、男性と女性の性役割が入れ替わるようになるという多様な性のあり方を述べた。第二章では、リアリティを追求した作品である「しろいろ」と「コンビニ人間」を比較し、主人公と他者との関係の変化を考察した。

村田作品全体にいえるのは、男らしさ、女らしさというジェンダーの固定観念を破壊しようとしていることである。男性優位社会や、異性愛主義、結婚や出産の強制など、村田は現代を生きる誰もが当然と思いついでいる常識に疑問を持ち、抗う。そして異常を独自の解釈で正当化し、物語の中の人物だけでなく、読者をも納得させてしまう。正常と異常は、表裏一体である。

「コンビニ人間」は、古倉のような他者や社会との関わりを断ち切る人間が、異常者であることを曝け出しているのではない。むしろ、芥川賞選考委員が古倉を「世間の常識から外れた」、「まともな人間」でないと決めつけている現代社会に対して、異常だと主張しているのではないか。世の中のがらみに対して無関心になり、コンビニと共に生きる選択肢を選んだ古倉を、村田は生き生きとした人間像の模範として提示しているのではないだろうか。タイトルの「差の消滅」とは、性差だけを指し

ているのではない。学校や社会など、世界には至るところに差別が存在する。村田は作品を通して、生きづらさを感じている少数派の人々を肯定し、新たな価値観の登場を促していると考ええる。

〔注〕

- (1) 『文藝春秋』二〇一六年九月号（文藝春秋）「芥川賞選評」三九一頁
- (2) (1) に同じ。三九四頁
- (3) 村田沙耶香『授乳』（講談社文庫）二〇一〇年四月
- (4) 村田沙耶香『しろいろの街の、その骨の体温の』（朝日文庫）二〇一五年七月
- (5) 村田沙耶香『ハコブネ』（集英社文庫）二〇一六年十一月
- (6) 『小説野性時代』二〇一四年八月号（角川書店）村田沙耶香「無性教室」
- (7) ジュディス・バトラー「訳」竹村和子『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』（青土社）一九九九年四月、三一頁
- (8) 村田沙耶香『殺人出産』（講談社文庫）二〇一六年八月
- (9) 村田沙耶香『消滅世界』（河出書房新社）二〇一五年十二月
- (10) 『新潮』二〇一三年一月号（新潮社）村田沙耶香「生命式」

- (11) 『GRANTA JAPAN with 早稲田文学03』(早川書房)二〇一六年二月  
村田沙耶香「素敵な素材」
- (12) 『文學界』二〇一六年六月号(文藝春秋) 村田沙耶香「コンビ二人間」
- (13) 『文學界』二〇一六年九月号(文藝春秋)「対談 我らコンビニ出身作家」一四〇―一五頁
- (14) 『新潮』二〇一三年七月号(新潮社)
- (15) 「第26回三島由紀夫賞受賞記念インタビュー 世界を肯定する場所へ」一九〇頁  
『ユリイカ』二〇一三年七月号(青土社)
- (16) 「光に満ちた毒をたずさえて しろいろの街で生きのびるための方法」一五一頁  
(15) に同じ。一五五頁